

CONSERVATION VOLUNTEERS **5**

Vol.

発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：JCVN）

- 特集_____ **誰もが参加可能な環境保全活動** 知的障害者による里山保全 p1
- 連載_____ **ボランティア、ケガと弁当は自分持ち？** p3
人材は「育成」か「成育」か？ p4
環境保全ボランティア活動と若者の自立支援 p5
- 報告_____ **リーダートレーニング研究会はじまる『リーダーシップ』** p6
リーダーミーティング『市民参加の松原保全』開催報告 p7
- お知らせ_ **イベント・ボランティア情報** p8

特集「誰もが参加可能な環境保全活動-知的障害者による里山保全-」

上原三知（JCVN 会員／信州大学農学部森林科学科 景観計画・造園学研究室）

I. はじめに

現代のランドスケープ分野において芸術(これまでの価値観をかえる)、環境、市民参加は重要なキーワードとなる。それゆえに市民参加による環境保全の実現は最も重要な関心事の1つである。特に我が国の里地・里山と呼ばれる二次的な自然環境では以下の3つの挑戦がなされている。

1. 田園景観の保全再生
2. 農林資源の持続的な活用システムの構築
3. 生物多様性および生態系の保全

1980年代の初頭から、上記に関連しては、ランドスケープ研究として、いくつかの具体的な環境保全手法が研究を通じて提案されてきた^{1,2,3,4,5}。さらに、市民参加を通じたその環境保全の実践に関する既往研究も進められてきた^{6,7,8,9}。

しかしながら、少子高齢化が進む日本では、これまで活動を支えてきた市民の高齢化や、参加者の減少がさけて通れない課題になっている。

II. 本研究の目的

日本では、専門家(研究者や環境NPO)により管理が望まれる里地・里山の約5%の面積しか管理できていないとの報告がある。それゆえに、持続的な環境保全の実現に向けて図1のような対立課題の解消が重要だと考えた。

1. 専門家による管理は具体的な環境保全効果が期待できるが、その管理面積が限定的なものになる。
2. 素人による環境保全は専門家のレベルには達しないが、多くの参加者による管理の可能性はある。

そこで、英国BTCVの環境保全活動をモデルとし、誰もが参加できる内容でありながら、実際の環境保全効果が期待できるプログラムの企画とその検証を3年間のアクションリサーチとして試みた。

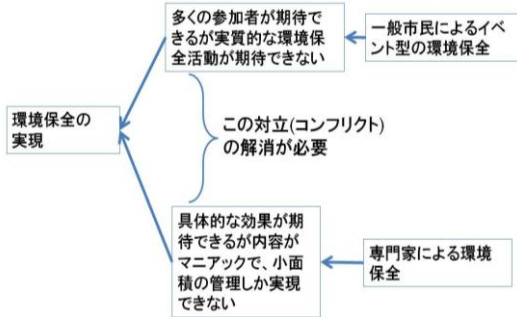


図1 持続的な環境保全の実現に向けた本アクションリサーチの対立課題

III. 結果

今回の取り組みを通じて、私たちは、これまで環境保全に関わってこなかった人々が具体的な環境保全に寄与するために2つの有効な視点を獲得することができた。

1) 環境保全の活動目標の単純化

例えば、写真1のように、管理対象となる植物や樹木を明確に提示する仕組みを考える。この除去目標の外来種をラミネート(標本)化して具体的に示すことで、障害者や素人の方々にも、やや専門的な環境保全活動への参加を期待することができる。



写真1 環境保全の目標と目的の単純化

この方法を実践することで、植物の知識がない5名の知的障害者の方々と実際に4時間で約500m²の外来種の除去による林床管理を達成することができた。

2) 伝統的な里地・里山の保全管理技術の実践

例えば、管理放棄された雑木林の密生した低木の刈り取りや、秋期の落ち葉かきなどが挙げられる。この伝統的な里山管理の実践は、放棄林の林

床の改善に効果を及ぼした。低木の刈り取りとその後の落ち葉かきを継続により、多くの山野草やキノコの再生が見られただけでなく、密生した低木に隠れていたゴミ(農薬のビンなど)の不法投棄を片付けることができた(写真2)。



写真2 素人にも実現可能な伝統的な里地・里山管理の実践例 -落ち葉かき & 低木の除伐-

上記の2つの視点をふまえることで知的障害者の方と具体的な環境保全を達成することができた。例えば、5名の障害者の4時間の作業で約400m²の低木の除伐作業を実現でき、その管理によって、11m³の不法投棄のゴミを発見することができた。また、放棄林の低木管理と落ち葉かきによって、放棄林の林床の生物多様性にも大きな改善が見られた。

図2は、障害者の方と管理した林床と管理を行わなかった林分の植生調査の結果を比較したものである。

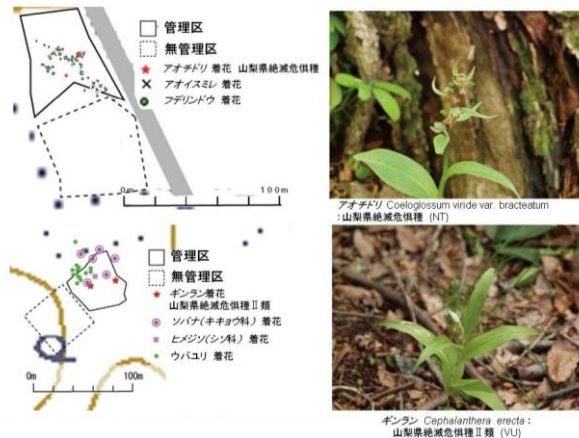


図2 管理区と無管理区の林床における山野草の着花状況の比較

うれしいことに、この数年で管理を行った林床では、この対象地の絶滅危惧種である以下の2種の山野草が花を咲かせることができた。

1. アオチドリ(山梨県絶滅危惧種NT)、
2. ギンラン(山梨県絶滅危惧種Ⅱ類)

表1 環境保全効果の波及効果-環境保全活動のメニューとリラクゼーション効果との関係-

実施日 (2009)	作業内容	作業場所	作業時間 (時間)	管理面積 (㎡)	リラクゼーション 効果*
5月27日	田植え	水田	4.0	527	—
8月30日	間伐	萌芽林	3.0	168	△ (1/11)
10月6日	稲掛け, 落穂拾い	水田	2.6	2000	○ (2/7)
10月20日	林床管理	生態園	3.5	500	△ (1/6)
11月27日	枝打ち, ススキ除去	放置林, 放棄農地	2.9	99	◎ (2/4)
12月15日	落ち葉かき	萌芽林, 雑木林, 生態園	2.8	251	◎ (6/9)
1月11日	落ち葉かき	萌芽林, アカマツ林	2.8	[68]	◎ (6/7)
2月10日	里山高木管理 枝, 薪整理	生態園	4.0	751	—

* 唾液アミラーゼ減少者数割合: ◎50%以上 ○25%以上50%未満 △25%未満, (減少者数/参加人数)
 -は未調査 1月の管理面積は, アカマツ林のみの計測値を示す

3) 環境保管理の波及効果

当初、本環境保全活動に参加した障害者の方々は、はじめての環境保全活動や信州大学の学生との対面に緊張した感じであった。しかし、2年目以降は、落ち葉かきなどの一度体験した活動後にストレスが減少する人が多い結果となった(表-1)。5名という少ない被験者の実験であり、個人差も大きいですが、伝統的な里山管理を継続することで、参加によるストレスの緩和が期待できる結果となった。

IV. まとめ

今回のアクションリサーチは、環境保全に興味を持たない新たな市民参加の可能性を検討するものであった。このバリアフリーな環境保全活動の企画と実施による可能性と課題の整理は、人口の10%を占める知的障害者の方々や、40%を占める高齢者の方々、また新たな時代を担う子供達にも環境保全への参加の枠を広げる成果になったと考えている。

本アクションリサーチは2009年-2012年にかけて三井物産環境基金の助成を受けて実施したものであり、2012年の2月にIFLA(International Federation of Landscape Architects)のNews Letter 'Landscape Architecture From the Grass

Roots' に英文で投稿した記事を翻訳したものである。

本活動成果は、JCVN の理事長である重松敏則九州大学名誉教授に監修いただいた拙著「バリアフリーな里地・里山の保全・活用ガイド」に詳しく詳細されている。

引用文献

- 1) 重松敏則・高橋理喜男(1982):レクリエーション林の林床管理に関する研究 アカマツ林における下刈りが現存量に及ぼす効果:造園雑誌 Vol. 45, No. 3, p157-167
- 2) 重松敏則(1983):レクリエーション林における下刈り, 光, 踏圧の諸条件が林床植生に及ぼす効果 造園雑誌:Vol. 46, No. 5, p194-199
- 3) 倉本宣(1984):都市公園における春植物ニリンソウ保全のための基礎研究:造園雑誌 Vol. 47, No. 5, p101-105
- 4) 養父志の夫・重松敏則・高橋理喜男(1985):カタクリ群落の保全管理に必要な生態的諸条件:造園雑誌 Vol. 48, No. 5, Page157-162
- 5) 近藤哲也・高橋理喜男(1988):アメニティ植生の構成素材として期待される数種の野生草花の種子発芽について:造園雑誌 Vol. 51, No. 5, p108-113
- 6) 重松敏則(1990):里山林の保全・管理に対する市民の参加意欲について:農村計画学会誌 Vol. 9, No. 1, p6-22
- 7) 中川重年(1999):市民参加による里山の植生管理に関する研究:神奈川県森林研究所業務報告 No. 31, p34-35
- 8) 大沢啓志・勝野武彦・葉山嘉一(2001):市民参加型の里山・雑木林管理におけるリーダー養成講座に関する研究:環境情報科学 別冊, p185-190
- 9) 重松敏則・小森耕太・朝廣和夫(1999):市民参加による里山・棚田保全活動の実績分析とコスト把握に関する事例研究:農村計画学会誌 Vol. 18, 別冊, p73-78

連載

JCVN理事による経験とノウハウの詰まった連載コラム!

■ ボランティア、ケガと弁当は自分持ち? (3)

小森 耕太 (JCVN 理事/山村塾事務局長)

久々の連載再開となりました。前回 vol.2 では、リスクアセスメント(危険評価)について紹介しました。危険を予測し、事故が起きた時の度合い、頻度、起こさないための対策を考えるというものです。このときに注意しなくてはならないのが、「具体的な対策」を考えて「実行する」というこ

とです。たとえば、「斜面での作業中に転んで頭を打つ」という危険を予測したとします。その対策として、「斜面は危ないので気を付ける」や「転ぶ危険があると参加者に伝えておく」では不十分です。より具体的に「ヘルメットを被る」、「スパイク付きの地下足袋を着用する」、「危険個所にロ



ープを張り、知らしめる」、「足元の道具を整理する」といったものでなくてはなりません。

また、対策を「実行する」

こともなかなか難しいものです。たとえば、「ヘルメットを被る」ことを決めていても、だれかが暑くてヘルメットを外して作業をしてしまい、リーダーとしてそれを見て見ぬふりをしてしまうのは、どんなに安全についての事前準備や説明を行っていたとしても意味がないわけです。私もB

TCVによるリーダー研修で、「なぜ注意できないのか?」と厳しく指摘を受けたことがあります。チームをうまくまとめること、コミュニケーションを大切にすることも大切だが、それらは安全な活動が行えてこそ。安全はすべてにおいて最優先されるべきであり、それを守ることはリーダーの責任だと。

気心した仲間との楽しい作業、忙しい中で参加してくれたことへの感謝の気持ち、熟練したスキルをもった先輩への敬意、こういった気持ちが、ついつい見て見ぬふりにつながってしまいます。安全管理を考える上で、そこは心をぐっと鬼にして、毅然とした冷静な対応がリーダーには求められており、それを実行することで真の信頼を得ることにつながることを肝に銘じたいものです。

■人材は「育成」か「成育」か（5）

平 由以子（JCVN 理事／特定非営利活動法人循環生活研究所事務局長）

山村塾の椿原さんに電話して「大豆の授業をしたいので」と600粒の大豆をいただいて福岡市内の小学校に持ち込みました。手作りの堆肥を使って、育てる、収穫、食べるの通年の活動を学校の先生が使えるプログラム（シラバス）化までする取り組みをしました。その1部を紹介します。

授業開始直後から10か月後の変化を図に現しています。10か月間の観察や経験による大豆の性質や特徴の概念を獲得していることがわかります。このような概念的拡大は、簡単な仕かけでも小学生には起こりやすいと言われていますが、この中でみられる因果関係が明確になり、類似した項目の知識や成員が形成されています。つまり、対象物である「大豆」に対する取り組みで得た体験や、調べた項目などが深まって「生きた知識」となり、生活の中でも活かされていくことが考えられます。小学生の場合、学習で構造的豊富化は必ずしもおこらないと言われていたが、内容によってこのような効果が見られます。

うまく広がる要因にはいくつかの要素があります。それは、組み立て（対象、期間、協力体制、プログラム）、教える側の子どもに対する姿勢が大きく影響するということがわかってきました。同じプログラムでもクラスによって大きく変わるのは、子どもが考えて発言するまで待つのか、発言まで待てないのかなどの大人の態度が関わっていることが、現在までの私たちの研究で明らか

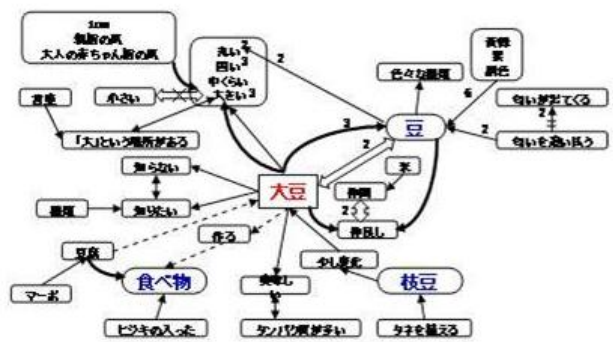
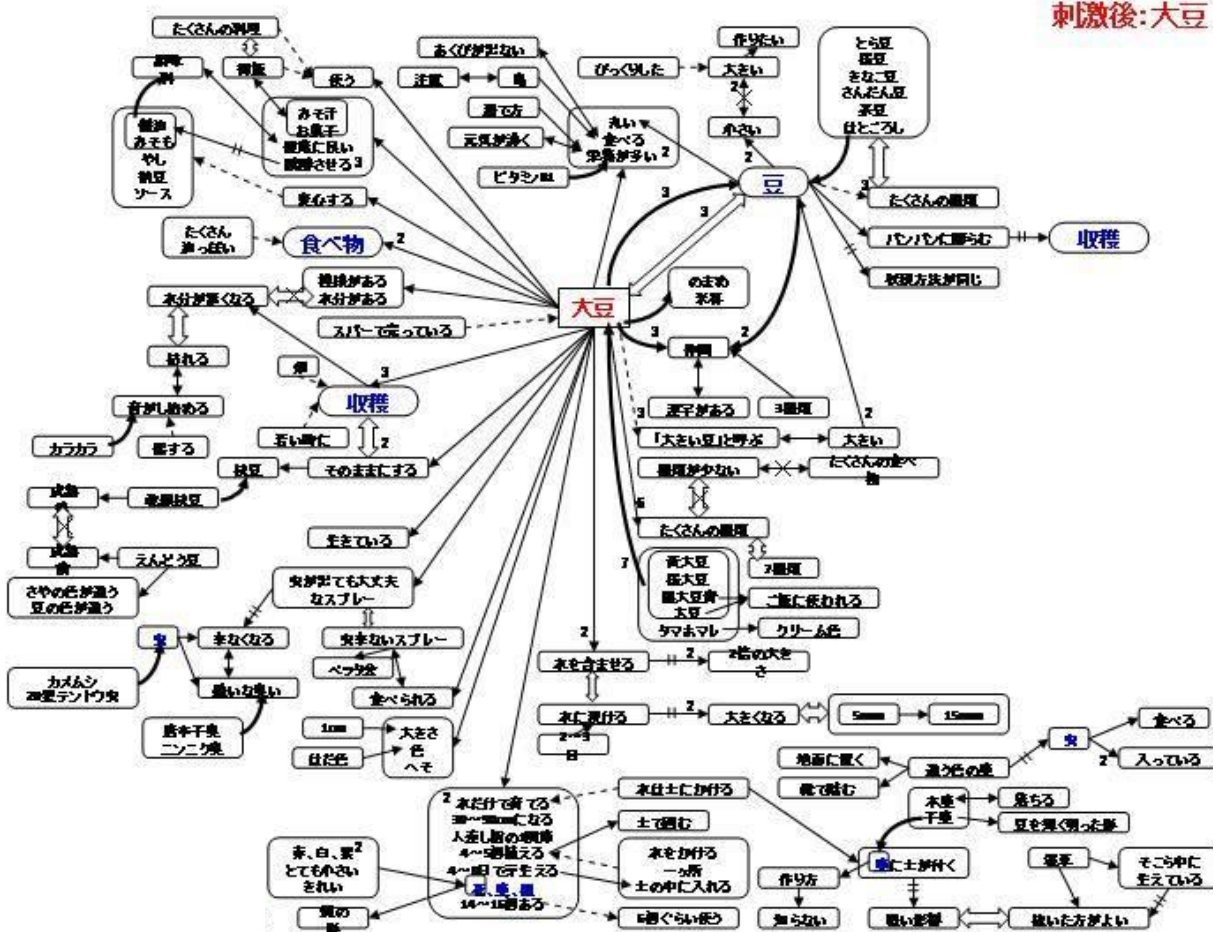


図1 取り組み直後「大豆」を表現。育苗、定植、成長の観察・管理、収穫、食（黄な粉・豆まき）、残さの堆肥化、できた堆肥でガーデニング、花で地域発信、大豆を新3年生に渡すイベントを年間で取り組む。

かになっています。ここで紹介したものは、環境教育もしくは授業を設計するための評価として有効です。このような評価手段も使いながら、全体を観て「楽しい」「面白かった」よりも、どこが「難しかった」どこで「つまづいて」どんなプロセスで「わかった」のかということ、評価やフィードバックの主な対象としています。ここで紹介したものは、環境教育もしくは授業を設計するための評価として有効です。このような評価手段も使いながら、全体を観て「楽しい」「面白かった」よりも、どこが「難しかった」どこで「つまづいて」どんなプロセスで「わかった」のかということ、評価やフィードバックの主な対象としています。今回の取り組みは、事前の教諭との打合せはもちろんのこと、事前に適正な技術提供のための協力関係と役割分担、毎年改正される授業内容の調査、リンクするカテゴリなどを抽出していきます。ここで17年目になる環境教育への取り組みの成果を出していくわけですが、それだけではまだす

べてがうまくいくわけではありません。まだまだ道半ばだとつぶやきながら、現場に学ぶ日々が続

いています。



刺激後:大豆

図2 10か月後。

■環境保全ボランティア活動と若者の自立支援（5）

～環境保全団体は、中間的就労の受け皿になることができるか？～

塚本 竜也（JCVN理事／特定非営利活動法人トチギ環境未来基地理事長）

厳しい雇用情勢や社会環境の中で、若年無業者の増加、生活保護受給者の増加が続く、政府はその対応に向けて、「生活支援戦略」を策定しています。生活支援戦略は包括支援、伴走型支援を掲げており、生活の立て直しから就労までを一貫して支援する体制を整えることを目指しています。その支援の柱のひとつに中間的就労があげられています。

中間的就労とは、ニート状態の若者や長期失業者、生活保護受給者などすぐに一般就労が難しい人が、低賃金でもお金を得ながら実践的に働くことで、就労に向けての力を高め、準備をすることが

できるようにするものです。福祉就労と一般就労の「中間的」な形態がイメージされています。例えば、軽作業で1時間に400円や500円のお金を得て働き、就労に必要な経験を継続的に積んでいくといったものです。

しかし、完全に労働としてしまうと最低賃金に関する法律に引っかかるため、法律との兼ね合いをどうするかや、低賃金で労働者を働かせ貧困ビジネスにつながるのではないかと、という懸念も大きく、十分な制度設計が必要となります。ですが、これらを上手くクリアできれば効果が期待できる支援だと考えます。次のステップとして、いか

にこの中間的就労の場を作っていくことができるか、つまり、中間的就労受け皿をどのようにつくるかが重要になってきます。

環境保全団体がその受け皿の一つになれるのではないかと期待をしています。環境保全活動の現場が持つ若者を育む力はこれまでのシリーズでも書かせていただきましたように、とても大きなものがあります。ボランティア活動であれば現在の環境保全団体が実施しているプログラムに若者を乗せることは可能です。しかし、少額のお金を支払うということを伴うと現状では困難です。

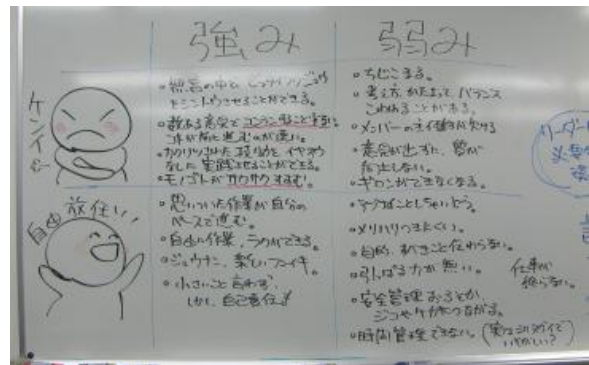
そこで、これから期待をしたいのが、自治体が保管する土地や公園、緑地、里山の管理を環境保全活動実施団体に委託をし、それを中間就労の場とするための経費を加算し、実施していくという流れの加速です。単なる場所の管理だけでなく、その管理のプロセスに付加価値を加えていくことはNPOが得意とするところです。環境保全の現場で、人を育むことと、よい環境をつくっていくことを両立させていければ、その成果は一石何鳥にもなります。そのためには、まずはこの中間的就労に関する事業に環境保全団体が参画し小規模でもモデルを作っていくことが重要だと考えます。

リーダートレーニング研究会始まる『リーダーシップ』

朝廣 和夫 (JCVN 副理事長/九州大学芸術工学研究院 環境・遺産デザイン部門)

「安全と楽しさに責任の持てる現場リーダーの育成を行う。」これは、久しく JCVN が目標としてきた人材育成活動の使命です。これまでの知見を洗練させ、より良い講座の提供を行うために、定期的に「リーダートレーニング研究会」を実施することになりました。これは、定期的にメンバーが集まり、「協同で考える場」とすること。従来のプログラムの実施確認ではなく、新しいプログラムの試行や、意味の確認などを意図する点が新機軸といえます。平成25年1月25日に第1回「リーダーシップ」をテーマに実施されましたので、朝廣の視点から紹介します。15名の一般参加を得て JCVN から朝廣、志賀が講師を務める陣容で「リーダーを増やしていくことを皆で考える会」、「もっとよい、リーダートレーニングをしていきたい」という趣旨説明の後に、「リーダーとは何か？」という講座と討論を行いました。プログラムは、BTCV のリーダーシップノート3)を紐解き、写真にある「権威主義」と「自由放任主義」の"極端な"2つのリーダーのスタイルについて強み・弱みを考え、「リーダーの資質に気付く」内容を実施しました。

さて、いざ実施してみて、内容は1つのプログラムに留めたことから、参加者から内容の理解に関する質問の声があがりました。研究会をイメージした主催者として、少々説明不足であったと今後の課題としました。一方で、新しい発見もあり



ました。このプログラムのように、最初に「リーダーの資質（計画力、組織力、人を巻き込む力など）」を抽出するステップを行うことにより、次に説明する「リーダーに求められる3つの要求（役割：作業、チーム、個人）」を支える論点が明快になったように思われます。トレーニングでは、これらの役割を支える個々の任務（目的の定義の仕方、計画の立て方、コミュニケーションの方法、ボランティアの支援の方法、現場の制御の方法など）の力を向上させることにより、リーダーの資質を鍛えることになる？ 関係が見えてきました。今後も、研究会での発見が楽しみです。

＜第2回は4月30日に開催します！
4月以降の予定は8ページに掲載。＞

リーダーミーティング『市民参加の松原保全』開催報告

浅田 真知子 (JCVN 事務局/特定非営利活動法人グリーンシティ福岡)

今年も、2月11日にリーダーミーティングを開催しました。テーマは、松原保全。玄界灘沿いで急速に拡大している松枯れをこれ以上広めないため、各活動の連携のきっかけづくりをねらいとしました。2011年の秋から冬にかけては福岡市東区、2012年には糸島市で特に大きな被害が出ていましたが、同じように危機意識を持って活動している、宗像、古賀、新宮、唐津と様々な地域で活動している方々にご参加いただきました。

里山・田園保全リーダーミーティング 2013

『市民参加の松原保全』

日時：2012年2月11日(土・祝) 13:30~17:00

会場：コミセンわじろ 多目的ホール

内容：オープニングトーク「今、なぜ松原保全か？」

- ・グリーンシティ福岡 志賀壮史さん
事例報告
- ・筑前新宮に白砂青松を取り戻す会
- ・さつき松原管理運営協議会
- ・奈多植林会
- 全体ワークショップ(ワールドカフェ)



NPO法人グリーンシティ福岡の志賀さんから、松枯れの状況についてや、そのメカニズム、団体での取り組みにつ

いてご紹介いただきました。松原のほとんどが国有林であり、そこで枯れた松は国が事業として伐って搬出しているものの、センチウを媒介するカミキリムシの幼虫は径1cm程の地面に落ちている小枝にも入っているとのこと。伐採業者では集めきれない大量の枝を、カミキリムシが羽化する直前までに市民活動で拾い集め、その後焼却やチップ化するという保全活動を各地で一斉にできないかのご提案でした。

続く事例紹介の一人目は、「筑前新宮に白砂青松を取り戻す会」より西健太郎さん。新宮の楯の松原では、平成2年に大きな松枯れ被害に遭い、平成10年から活動を開始したとのこと。現在で

は松原の保全・整備活動と並行し、周辺の樹林地整備も含めた森づくりを行っているそうです。

二人目は、「さつき松原管理運営協議会」より桑野通孝さん。宗像市のさつき松原では「アダプト制度」を導入し、現在は全12ヘクタールを区画に分け、23団体で草刈りやゴミ拾いの活動を行っているとのこと。国有林である松原での保全活動に、市町村が積極的に制度導入や資金補助を行うことで活動が広がっている好事例ではないでしょうか。

三人目は、「奈多植林会」より藤尾治好さん。奈多の松原は、福岡市内で2011年度の被害が特に目立った場所です。放置され、



荒れていた松原の手入れを長年行い、地域に住む人々から資金や協力を得ながらこれまで活動してきたとのこと。しかし、今回の被害は甚大で、あと数年しか持たないのでは、という声も聞かれるそうです。

おなじみの「おかしセッション」で用意したのは、松原にちなんだおやつや、地元のイチゴを使ったジャム、フェアトレードのコーヒー、九州北部豪雨の被災地となった笠原のお茶などもりだくさん。今回は、各活動を紹介するパネル・写真や、松原での思い出を寄せ書きコーナー等、展示スペースも充実させました。写真で見ると被害状況やかつての松原の姿、取り組みなどがはっきりわかり、お茶やおやつを片手に展示パネルの前で立ち話を楽しむ方が多くいらっしゃいました。

後半のワールドカフェのお題は「これから松原どうする?」。日頃から松原保全や地域活動に参加している方が多く、議論はテーブルごとに大い



に白熱しており、保全に関する技術的な情報交換もあったようです。20分間ずつ、3回繰り返すおしゃべりの合間には、ご参

加されていた方の中から、「NPO 法人志賀島歴史研究会」「NPO 法人循環生活研究所」「NPO 法人唐津環境防災推進機構 KANNE」で活動する3名の方に感想やご意見を伺いました。

松原保全には、薬剤散布やカミキリムシの移動距離に伴う対策の連携、被害木の処分など多くの課題があり、簡単に解決できないのが実情です。しかし、団体同士が顔を合わせ情報交換することで、協働の可能性を感じることができたのではないかと考えています。同じ地域で活動する奈多植

林会さんと NPO 法人循環生活研究所さんが、早速松葉の堆肥づくりを行うとのこと。このような連携が各地で広まることを期待しています。ご参加いただいた皆さん、ありがとうございました。



お知らせ

イベント・ボランティア情報

●リーダートレーニング研究会

JCVNの講座テキストを土台に、意見交換しながらリーダーについて学びを深めます。「安全なボランティア作業を目指したい」「リーダーやリーダーシップについて考えたい」「次世代リーダーを育成したい」という方は是非ご参加ください！

第2回「現場リーダー」

と き 平成25年4月30日 18時半～20時半
 ところ 福岡市 NPO・ボランティア交流センター
 (通称あすみん/福岡市中央区大名 2-6-46)
 進行役 朝廣和夫 (JCVN 副理事長)
 小森耕太 (JCVN 理事)
 参加費 300円 定員 20名程度
 申込み TEL/FAX: 092-215-3966
 メール: jcvn@greencity-f.org

——第3回以降の予定——

※日程および詳細は決定次第ご案内します。

- 6月 チームビルディング
- 8月 ボランティアと災害支援
- 9月 リスクマネジメント/リスクアセスメント
- 12月 地域をどう巻き込むか？

●各地でのイベント・ボランティア情報

◇八女市黒木町・笠原復興プロジェクト

と き 3/9、15、16、29、30、31
 集 合 9:00に八女市黒木総合支所の駐車場
 主 催 山村塾
 申 込 TEL/FAX: 0943-42-4300
 メール: sannsonn@f2.dion.ne.jp

◇各地の松原保全活動

「里山・田園保全リーダーミーティング2013 市民参加の松原保全」にてご参加いただいた団体が行う松原保全に関するイベントです。詳細は、各窓口および主催者へお問い合わせください。

虹の松原フェスティバル

と き 3月23日(土) 10:00～15:00
 ところ 虹の松原 東の浜海浜公園
 内 容 松葉かき競争、七不思議ツアー、枝打ち体験、植樹、松原おこしの販売など
 主 催 虹の松原フェスティバル実行委員会
 問合せ NPO法人唐津環境防災推進機構KANNE
<http://www.karatsucity.com/~kanne/>

松の枝拾いボランティア活動

と き 4月下旬頃
 (詳細未定)
 問合せ NPO法人グリーンシティ福岡
<http://www.greencity-f.org>

CONSERVATION VOLUNTEERS 5

- 発行日: 平成25年3月1日
- 発行頻度: 年4回
- 発行: 特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク (略称: JCVN)
- 事務局: 〒810-0022福岡市中央区薬院4-5-2-202
 tel/fax: 092-215-3966
 e-mail: jcvn@greencity-f.org